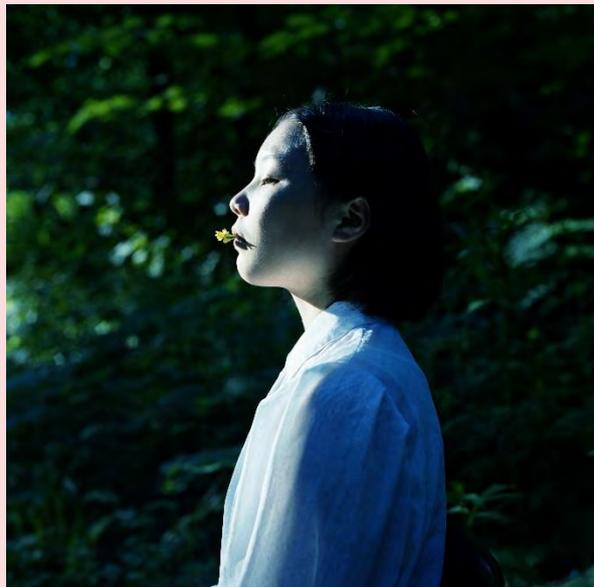


総合開館 30 周年記念 TOP コレクション 不易流行

TOP 30th Anniversary TOP Collection: Continuity and Change

2025 年 4 月 5 日(土)―6 月 22 日(日)



東京都写真美術館は、平成 2（1990）年の一次施設開館を経て、平成 7（1995）年に日本唯一の写真と映像の総合的な専門美術館として総合開館しました。総合開館 30 周年となる 2025 年は、「総合開館 30 周年記念」と題した展覧会や関連イベントを多数開催し、1 年をとおして写真・映像の未来をさまざまにじっくりと考えます。

「総合開館 30 周年記念 TOP コレクション」展は二期にわたって開催（第一期：「不易流行」（4/5-6/22）、第二期：「トランスフィジカル」（7/3-9/21））。東京都写真美術館としては初の試みとなる、7 名の学芸員が共同企画し、二期あわせて 10 のテーマで構成するオムニバス形式の展覧会です。約 38,000 点に及ぶ収蔵作品を多角的な視点から選りすぐり、写真と映像の魅力をご紹介します。

本展のタイトル「不易流行」は、江戸初期の俳人・松尾芭蕉（1644-1694）が俳句の心構えについて述べた言葉に由来します。「不易を知らざれば基立ち難く、流行知らざれば風新たにならず [現代語訳：変わらないものを知らなくては基本が成立せず、流行を知らなくては新しい風は起こらない] 」という言葉は、現代の私たちも芸術に対する姿勢として心に刻んでおくべきものです。この「不易流行」の心を大切に、本展は過去の芸術表現を深く理解し、その魅力を今に伝えていくとともに、現在の表現や時代の潮流にもしっかりと目を向けようとするものです。19 世紀から 20 世紀、現代までを取り上げる 5 つのテーマで当館コレクションを読み解きます。

TOP コレクション展について

1986年に第二次東京都長期計画で「写真文化施設の設置」が発表され、東京都写真美術館は1988年より作品収集を開始しました。学芸員の調査研究に基づき、これまでに収集された作品数は約38,000点に及びます*。TOPコレクション展は、黎明期から現代まで写真・映像史を網羅するような、東京都写真美術館の体系的なコレクションの中から、特定のテーマに沿って作品を厳選することで、写真・映像文化への理解を深め、時代を超えて語り継がれる優れた写真・映像作品を紹介する重要な場として、毎年開催しています。*37,849点（令和6年3月31日現在）

本展のみどころ

東京都写真美術館初となる5人の学芸員によるオムニバス形式の展覧会

総合開館30周年記念 TOP コレクション展「不易流行」は、当館初の試みとして5名の学芸員が共同企画するオムニバス形式の展覧会です。展覧会には5つのセクションがあり、学芸員が独自の視点でそれぞれのテーマを設定。写真が捉える歴史に着目したものから現代作家の表現まで、多様なテーマが「不易流行」によってつながられ、共同企画ならではの作品の共鳴をお楽しみいただけます。

また、担当学芸員5名のうち4名がTOPコレクション展を初めて企画します。35年以上にわたり積み重ねられてきた当館収蔵作品を新たな視点で捉えた本展を通じ、コレクションの新たな魅力を発見できる機会となるでしょう。

赤瀬川原平〈版画集 トマソン黙示録〉を初展示

赤瀬川原平〈版画集 トマソン黙示録〉(1988年)を初展示します。前衛美術家や小説家などとして幅広く活躍した赤瀬川原平(1937-2014)は、80年代のはじめに、町の片隅にある無意味な造形物や正体不明の物件、現象を「トマソン」と名付け、ユーモラスな視点でそれを観測、報告する活動を行いました。本展では、14点組のポートフォリオから9点を展示します。



赤瀬川原平《No.7 風のレコード 町田市成瀬 1988.5》
〈版画集 トマソン黙示録〉1988年©2014 N.Akasegawa

「コレクションの歴史から何を学び、未来に伝えるか」をテーマに、連続対談を開催

第一線で活躍する写真・映像の研究者、教育者と学芸員による対談「連続対談 過去と未来をつなぐ」を二期にわたり計4回開催。「不易流行」展では、日本大学芸術学部写真学科 准教授の鈴木麻弓氏、東京藝術大学大学美術館 教授の古田亮氏を講師に迎え、東京都写真美術館コレクションについて考えます。

インクルーシブプログラム「手話を交えたQ&Aショー」初開催

東京都写真美術館は、障害の有無にかかわらず、多様な背景を持つ人が作品との出会いを楽しむことができる鑑賞プログラムを2017年から継続して実施しています*。本展では、新たなインクルーシブプログラムとして「手話を交えたQ&Aショー」を初開催。耳の聞こえない鑑賞案内人・小笠原新也氏が、出品作品や展示意図などについて担当学芸員に質問します。事前申込不要で、どなたでも気軽に体験できる本プログラムの詳細は、関連イベントをご覧ください。

*2017年～2019年「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」、2020年～「インクルーシブワークショップ ときどき見えない、のち話す、しだいに見える」

主な出品作家（予定）

ジャック・アンリ・ラルティエグ、アウグスト・ザンダー、下岡蓮杖、フェリーチェ・ベアト、オノデラユキ、山元彩香、石内都、塩崎由美子、片山真理、大塚千野、ドロシア・ラング、アルフレッド・スティエグリッツ、林忠彦、江成常夫、菱田雄介、植田正治、杉本博司、山上新平、赤瀬川原平、田村彰英、長野重一、潮田登久子、鬼海弘雄、瀬戸正人、大西みつぐ、山崎博、荒木経惟、中野正貴、佐内正史、澤田知子、長島有里枝、野口里佳、杉浦邦恵、古橋悌二 ほか

本展の構成

第1室 写された女性たち 初期写真を中心に

第1室では、初期写真を中心に、20世紀初頭にかけて写真に写された女性たちを取り上げます。時代とともに変化する写真技法によって、様々な階級や職業、民族の女性たちが、異なる場面、環境、そして写真家の求める姿で現れます。一方でこの時期は、女性の政治参加や権利向上を求める運動が最初に盛り上がった頃と重なります。写真では、撮られるかぎり、誰かの求める像として写されます。とりわけ女性は被写体として、長い期間にわたって、多くを求められてきました。しかし、果たしてこの部屋の女性たちは、撮られる視線に応じているだけでしょうか。一見、他者から求められる姿で写りながらも、わずかにでも自分が望む姿で写ろうとする「抗い」に着目します。

[企画] 佐藤真実子（展覧会実績：「アール・ブリュット ゼン&ナウ 2021 レターズ ゆいほどける文字たち」(2021)「線のしぐさ」(2022)ほか(東京都渋谷公園ギャラリー)、2024年度より東京都写真美術館で教育普及を担当)



1-1



1-2



1-3



1-4



1-5

1-1：下岡蓮杖《(手を繋ぐ二人の女性)》1863-1876年頃 鶏卵紙 1-2：フェリーチェ・ベアト《傘をさす日本人女性》1863-1877年頃 鶏卵紙に手彩色 1-3：アウグスト・ザンダー《母と娘、農民の妻と鋤夫の妻》〈時代の顔〉より 1912年 ゼラチン・シルバー・プリント 1-4：大久保好六《豊子さん》1926年 プロムオイル印画 1-5：ジャック・アンリ・ラルティエグ《スザンヌ・ランランのトレーニング、ニース》1921年 ゼラチン・シルバー・プリント

第2室 寄り添う

第2室では「寄り添う」をテーマに、大塚千野、片山真理、塩崎由美子、石内都、4作家の作品を紹介します。「寄り添う」という言葉は、はっきりと目に見える行動にとどまらず、心や気持ちを受け止めること、相手を思いやり、共感する表現として用いられています。そして「寄り添う」という行為は、他者に対してだけでなく、自分自身が日々過ごす中で痛みや悩みを抱えてしまったときにも有効な手段ともなり得るのではないのでしょうか。痛みや悩みとともに生きていくために、作家がどのように自身や周囲の人々に心を寄せて作品を制作したのか、4名の作家たちの作品を通して、寄り添うことの多様なあり方について考察します。

[企画] 大塚千野（展覧会実績：2025年度開催予定「日本の新進作家 vol. 22」）



2-1



2-2



2-3



2-4

2-1：大塚千野《1982 and 2005, Paris, France》〈Imagine Finding Me〉より 2005年 発色現像方式印画 2-2：片山真理《小さなハイヒールを履く私》2011年 発色現像方式印画 2-3：塩崎由美子《ウナ 2008》〈UNA〉より 2008年 発色現像方式印画 2-4：石内都《mother's #52》2003年 発色現像方式印画

第3室 移動の時代

第3室では陸、空、そして宇宙へと人類の活動範囲が劇的に広がっていった「移動の時代」に焦点を当てます。20世紀における交通の発達と技術革新は、物理的距離だけでなく、人々の意識や価値観をも変え、世界をより密接に結びつけました。一方で、政治的・経済的困難から逃れるために、人々が国境を越えての移動を余儀なくされる時代でもありました。繋がりと分断、両方の側面を持つ「移動の時代」を捉えたまなざしは、歴史を鮮やかに描き出し、当時の人々の思いを鮮明に伝えてくれます。それらを通して、20世紀の「移動」が現代にどのような影響を及ぼしているのかについて考えます。

[企画] 室井萌々（展覧会実績：2025年度開催予定「TOP コレクション W. ユージン・スミス」）



3-1 2 3
4 5

3-1：エドワード・シェリフ・カーティス《IRON PLUME-OGALALA》〈THE NORTH AMERICAN INDIAN Vol.3〉より 1907年 フォトグラビア印刷

3-2：アルフレッド・スティーグリッツ《三等船室》1907年 フォトグラビア印刷

3-3：ルイス・ハイン《アメリカへ乗り込む、エリス島》1908年 ゼラチン・シルバー・プリント

3-4：林忠彦《復員(品川駅)》〈カストリ時代〉より 1946年 ゼラチン・シルバー・プリント

3-5：NASA《ミッション：アポロ(サターン) 14号》1971年 ダイ・トランスファ・プリント

第4室 写真からきこえる音

第4室では、「音」を意識させる作品を展示します。瞬間を切り取り、記録するメディアである写真は、時間の流れを伴う「音」を記録することはできません。しかし写真に捉えられた空間には、たしかに「音」が存在します。私たちは写真を見る時に、自身の経験や記憶を通して、写真に写ってはいない、見えない場所や時の流れを想像することがあるでしょう。同様に、写真として切り取られることでこぼれ落ちた情報である「音」を意識しながら写真を見ることは、そこにあったはずの「音」という現象を捉えなおす契機となるでしょう。

[企画] 山崎香穂 (展覧会実績：2025年度開催予定「TOP コレクション トランスフィジカル」)



4-1



4-2



4-3



4-4

4-1: 秋山亮二《映らないテレビ》〈スクラップランド〉より 1969年 ゼラチン・シルバー・プリント

4-2: 高梨豊《根津・谷中 台東区谷中四ノニノ三九 伊勢五本店》〈町〉より 1977年 発色現像方式印画

4-3: ナンシー・リー・カッツ《コリン・デイヴィス》〈Pantheon〉より 2002年 ゼラチン・シルバー・プリント

4-4: 山上新平《Epiphany》より 2020年 インクジェットプリント

第5室 うつろい 昭和から平成へ

第5室では、東京都写真美術館が総合開館した1995年に着目し、昭和末期から平成初期の写真・映像表現とその時代背景に目を向けます。総合開館記念展「写真都市 TOKYO」(1995年)の出品作品では作家それぞれの視点から、古いものと新しいものが入り混じる当時の都市風景と人々の日常生活が写し出されています。開発が進むウォーターフロントや郊外風景は、この時代の象徴でもあります。一方で、90年代は、写真・映像表現の分野において女性作家たちや次世代を感じさせる新しい才能が次々と登場した時期でもありました。第5室では「写真都市 TOKYO」を再現するとともに、当時の新世代作家たちの出世作を紹介。30年前の時代に思いを馳せます。

[企画] 石田哲朗 (主な展覧会実績: 「山崎博 計画と偶然」(2017)、「内藤正敏 異界出現」(2018)、「あしたのひかり 日本の新進作家 vol.17」(2020)、「野口里佳 不思議な力」(2022)、「TOP コレクション 時間旅行」(2024) ほか)



5-1



5-2



5-3

5-1: 中野正貴《Udagawa-cho, Shibuya-ku, Jan. 1991》〈TOKYO NOBODY〉より 1991年 発色現像方式印画 5-2: 荒木経惟《冬の旅》より 1990年 ゼラチン・シルバー・プリント 5-3: 田村彰英《レインボーブリッジ》〈湾岸〉より 1992年 発色現像方式印画

関連イベント

□ 担当学芸員によるギャラリートーク

4月11日（金）14:00-

4月25日（金）14:00-

5月23日（金）14:00- [手話通訳付き]

6月20日（金）14:00- [手話通訳付き]

※当日有効の本展チケット、展覧会無料対象者の方は各種証明書等をお持ちのうえ 3階展示室入口にお集まりください。

□ 連続対談 過去と未来をつなぐ

「コレクションの歴史から何を学び、未来に伝えるか」をテーマに、第一線で活躍する写真・映像の研究者、教育者と TOP コレクション展の共同企画を行う当館学芸員による対談シリーズです。

5月30日（金）登壇者 | 鈴木麻弓（日本大学芸術学部写真学科 准教授）、石田哲朗（当館学芸員）

6月13日（金）登壇者 | 古田亮（東京藝術大学大学美術館 教授）、佐藤真実子（当館学芸員）

各回とも 18:30-20:00

会場 | 東京都写真美術館 1F スタジオ 事前申込制、定員 50 名 参加費 | 無料

※申込方法等の詳細は当館ホームページをご確認ください。

□ インクルーシブプログラム「手話を交えた Q&A ショー」

耳の聞こえない鑑賞案内人の小笠原新也さんが、鑑賞者を代表して、展覧会の担当学芸員に、出品作品や展示意図などについて質問する新プログラム。

日時 | 6月7日（土）14:00-15:00

会場 | 東京都写真美術館 2階ロビー 当日受付、先着順、手話通訳付き

定員 | 50 名 質問者 | 小笠原新也（耳の聞こえない鑑賞案内人）

※参加方法・申込方法等の詳細は当館ホームページをご確認ください。

出品点数 約 220 点（予定）

展覧会図録

『総合開館 30 周年記念 TOP コレクション 不易流行』

B5 変型（182mm×240mm）192 ページ（予定）、価格未定、東京都写真美術館発行

編集・執筆：佐藤真実子、大崎千野、室井萌々、山崎香穂、石田哲朗（東京都写真美術館学芸員）

開催概要

展覧会名（和） | 総合開館 30 周年記念 TOP コレクション 不易流行

展覧会名（英） | TOP 30th anniversary TOP Collection: Continuity and Change

会期 | 2025 年 4 月 5 日[土]— 6 月 22 日[日]

会場 | 東京都写真美術館 3 階展示室

主催 | 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

後援 | J-WAVE 81.3FM

電話 | 03-3280-0099 WEB | www.topmuseum.jp

総合開館 30 周年記念特設ウェブサイトをオープンしました https://topmuseum.jp/30th_anniversary.html

開館時間 | 10:00-18:00 (木・金曜日は 20:00 まで、入館は閉館 30 分前まで)

休館日 | 毎週月曜日 (ただし 5/5[月]は開館。5/7[水]は休館)

観覧料 | 一般 700 円ほか

* 中学生以下及び障害者手帳をお持ちの方とその介護者 (2 名まで) は無料。

* オンラインで日時指定チケットを購入いただけます。

* 本展はやむを得ない事情により内容を変更する場合があります。

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。

* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよび和英いずれかクレジットの表記をお願いします。

* オンライン媒体への図版掲載は作品保護の観点から、長辺 800~1000 ピクセル以下をご利用ください。

* 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館 〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM 電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 / www.topmuseum.jp

東京都写真美術館 管理課 企画広報係 press-info@topmuseum.jp